

西淀川記憶あつめ隊

Vol.5

西淀川の北西の広大な土地に「中島工業団地」があります。西淀川区民でも行ったことがある人は少ないかもしれません。地図上では中島二丁目になります。昔の地名でいえば、「外島」「布屋」と呼ばれ、ハンセン病の療養所「外島保養院」があった場所です。中島工業団地の変遷を、大阪工業団地協会の顧問の千葉修さんに伺いました。

2004年10月29日
聞き取り



千葉修さん

◆海の中の煙突

「工業団地では普通、広い土地を買って好き勝手に造成していくということが一般的です。ここはそうでなく先に土地を売ってしまいました。後から道路をいくらしようか、どこにつけようかなど操業しながら開発してきました。何をするにせよお金がかかります。その都

度お金を集めながら進めました。」と、中島工業団地の難しさについて語ります。「1939年に大谷重工業が中島の土地を取得します。第二次大戦中に溶鉱と耐火煉瓦工場を建設しま

したが、軍部の指令によって、創業開始寸前に溶鉱炉は解体され、満州に移動し稼動したと、大谷の年配者に聞きました。「中島は1934年、1944年、1945年と高潮で堤防が決壊し、水浸しになっています。海の中から煙突が突き出ていた…という話はよく聞きますが、その煙突は大谷重工業のものです。

◆神崎川の土砂でかさあげ

「1959年(昭和34年)11月から中島川河口で大型船舶が航行可能な航路浚渫工事(深さOP-12m)を行いました。川の中心が大阪と兵庫の県境になり、大阪側の浚渫(しゅんせつ)土砂は団地内に入れ、兵庫側の浚渫土砂は兵庫、現在の東海岸町に入れました。」と、神



水没した工場(布屋町)『西淀川区制50年の歩み』より

崎川の土砂で、中島の土地がかさ上げされました。千葉さんは、この浚渫の翌年に大谷重工業に入社します。「1967年に10tと30tのクレーンを備えた2万t岸壁が完成し、大谷の尼崎工場で使用する鉄屑の荷揚げに埠頭設備を使用しました。」しかし、

「大谷の放漫、ワシマン経営等で行き詰まり、団地内土地の一部の約82万6千㎡(250003坪)と埠頭設備を債権者7商社に代物弁済しました。」と土地を売却することになり、千葉さんはその地籍整理に取り掛かることになりました。

◆土地を整理して工業団地に

地籍整理は「全部大谷の土地だと思っていたのに、大阪府の土地が



中島工業団地上空から撮影

あったり、陸軍の砲台跡地があったり。法務局には2〜3日ごとに通っていました。」と大変な作業となりました。また、「海の中に立っていた2本の煙突を爆破したのは自分です。」とのこと。千葉さんの努力があつて、現在の工業団地に姿を変えたことがわかりました。現在は、産業廃棄物の積み出し港があるなど、様々な変化を遂げてきた中島工業団地。これらの変化にも注目です。

林